

セッションⅡ

「越境する文学の諸相～ことばを越える・ジャンルを越える～」

【総括】

谷口幸代*

本セッションは実作者による講演の第一部、研究者による個別報告と五名の登壇者全員によるパネルディスカッションの第二部、以上の二部構成で行われた。この企画のねらいは、実作者と研究者の対話を通して日本の文学を（越境）という観点から世界文学の文脈でとらえ直すところにある。以下、紙幅の許す範囲で、本誌に掲載されていない質疑応答を中心に報告し、セッションⅡの概要に代えたい。

まず、第一部の一人目の講師である田原氏は中国河南省に生まれ、1991年に留学生として来日した。以後、日本語と中国語のバイリンガル詩人として創作を続けている。日本語の第二詩集『石の記憶』により中国人初のH氏賞を受賞した。また日本の現代詩の翻訳家としても活躍している。

田原氏の講演「本当のバイリンガル」は、単に母語以外の言語で創作する作家ではなく、母語と母語以外の複数の言語にまたがって創作し、双方で読者を獲得する作家こそ「本当のバイリンガル作家」と定義した。質疑応答では、田原氏の問題提起を受けて、読み手の思考を刺激する、自然な日本語とは異なる表現こそ読み手がバイリンガル作家に期待することだとの発言があり、これに対して田原氏から、自身の日本語での創作に関して、意識はしていないが、日本語と中国語は同じ漢語を共有するため、日本語の中に中国的な表現が入り込み、その結果、差異や違和感が生まれるとの認識が示された。その他、不利な条件を

自分に課すところから新しい表現が出てくるとすれば、敢えて自分を不利な状況に追い込む詩人のあり方もあり得るとの指摘、あるいはたとえばアゴタ・クリストフのようにそうした状況に追い込まれざるを得なかった人々のバイリンガル性への言及があり、さらに話題が広がった。なお、田原氏の講演は『現代詩手帖』本年3月号にも掲載予定である。

続く二人目の講師、高橋睦郎氏は、古典から現代文学まで東西にわたる広範な知識を背景に、詩を主軸としながら、俳句、短歌、小説、評論、オペラ、能、狂言、浄瑠璃とジャンルを越境し、独自の文学世界を築き上げてきた。

「沈黙に学ぶ」と題された講演では、詩歌、特に俳句における沈黙の意味、東日本大震災や福島第一原発事故のような未曾有の事態を題材とする際に果たされる沈黙の力について講演された。これを受けた質疑応答では、死者文芸の位置付け、短歌と俳句の差異、英語による句作、外国人が日本語で詠んだ俳句、創作と沈黙の関係など多岐にわたる質問があった。

これらの質問に対して、高橋氏は、高野ムツオ『萬の翅』の俳句と佐藤通雄『昔話』の短歌の比較から、散文と異なり沈黙によって支えられる詩歌の特質について再度説明された。また『萬の翅』や『昔話』と同様に東日本大震災や福島第一原発事故を題材とした自身の詩「あの時から」にも言及された。「あの時 隔ての壁が崩れたのだ／あの瞬間から 世界はこの世でか／放射する兎つ光を浴びた」と、氏ならではの死生観・世界観

*お茶の水女子大学准教授

に基づいた作品が詩人自らによって朗読された。「詩はしゃべり過ぎ」だという例に自作を引き合いに出されたのだが、ジャンルの境界を越えた文学の力が来聴者の胸を打ち、拍手がわき起こった。

さらに高橋氏は俳句と短歌の違いについて、「別れてやる」というのが俳句、「でも別れられない」のが短歌とユーモラスにたとえ、したがって俳句は「決断の形式」、短歌は「未練の形式」となると説明された。また、創作と沈黙の関係については、ヴァレリーやマラルメを例に、「多作他捨」といわれる俳句の世界で、いかに作らないか、自分を空にして創作の時が訪れるまで待つことも大切だとし、その意味でも沈黙は文学に重要な役割を果たすと述べられた。

なお、高橋氏の講演は、54ページの付記にあるように、改稿されて『俳句』2014年10月号に掲載された。本誌にその改稿版を転載させていただいたことを記して謝意に代える。

続いて第二部に移り、谷口は、原発問題を扱った、日独バイリンガル作家・多和田葉子の「夕陽の昇るとき～Still Fukushima～」を取り上げ、この戯曲における〈境界〉の意味を考察した。質疑応答では、題名の意味、言葉遊びを取り入れることの是非について質問が出された。回答は本誌掲載の拙論に記したので、ここでは省略する。

次に郭南燕氏は、キリスト教宣教師からアーサー・ビナードら現代のバイリンガル詩人まで取り上げながら、多言語作家の文学が投げかける今日の課題を報告した。質疑応答では、バイリンガル文学の定義や外国人が日本語で書くことの意味を確認する質問が出された。これらに対して、郭氏は、バイリンガル文学とは、何人であるか、何語で書くか、を基準に定義されるべきものではなく、外国の文化を理解しながら書く営為であるとし、日本語を自ら作りたいというリービ英雄や、日本語で書かなければ日本人に届かないと考えた宣教師の例を挙げ、日本人とは異なる独特の表現をめざす彼らの意気込みを見たいと説明した。ま

た、成長過程で失われやすい柔軟な思考を回復するための方策として、外国語を学ぶことを挙げた。

最後に稲賀繁美氏は、オリジナルとしての原作とその等価物であるコピーとしての翻訳という従来の理解に疑問を投げかけ、原作から翻訳への過程で翻訳者がとりつかれる局面こそ看過すべきではないと結論された。質疑では、文学という経験を深めるものとして翻訳を捉えることの意味が再確認された他、母語を越えて異言語で創作する作家がぶつかる自らの他者性を考えることが、本シンポジウムの各講演・報告の問題系一〈越境〉〈沈黙〉〈憑依〉—をつなぐ鍵となるのではないかとこのシンポジウム全体に関わる発言があった。

ついでパネルディスカッションでは高橋氏と田原氏にご自身の作品の朗読をお願いしてから、登壇者全員が会場からの質問に再度答える時間とした。本学教員から、他大学教員、本学学生・大学院生、他大学学生、本学卒業生、俳人、詩人、編集者、一般の方まで多彩な来聴者から様々な質問や意見が出された。当日のアンケートには、「またとない機会、考えるテーマ!」、「主流の文学史に汲み取られにくい、境界の文学の最前線を知ることができ、勉強になりました」、「全体に視野が広がっていくような気のするシンポジウムでした」、「自作の詩の朗読、ありがとうございました。パネラーの方がフロアとコミュニケーションしようとなさる誠意を質問一つ一つへの解答でも感じました」といった大変有り難い感想が寄せられた。このシンポジウムが少しでも実り多いものになったとすれば、四人の登壇者と来聴者の皆様のおかげである。改めて厚くお礼を申し上げる。

最後になるが、当日参加した本学学生たちの印象記を集めて冊子にまとめ、登壇者の方々にお届けできたことをご報告したい。